新約聖書注解シリーズ

ルカの福音書

11 － 24 章

ノーマン・クロフォード著

The Gospel According to

LUKE

An Exposition

by

Norman Crawford

新約聖書注解シリーズ

ルカの福音書

（11 － 24 章）

ノーマン・クロフォード著

一節ごとの詳しい解説

伝 道 出 版 社

LUKE

RITCHIE NEW TESTAMENT COMMENTARIES

(What the Bible teaches)

An Exposition

by

Norman Crawford

Publishers

John Ritchie Ltd.

Kilmarnock, Scotland

EVANGELICAL PUBLISHERS

Tokyo, Japan

目次

第一一章……5
第一二章……36
第一三章……72
第一四章……103
第一五章……129
第一六章……153
第一七章……183
第一八章……211
第一九章……242
第二〇章……280
第二一章……306

第二二章……334
第二三章……387
第二四章……430
補遺……470

四　エルサレムへの旅（九・51－一九・27）

10　祈りに関する教え（一一・1－4）

福音書で提示され、新約の書簡で確立されている真理はたくさんある。使徒の働きの一章一節に「イエスが行い始め、教え始められたすべてのこと…」と記されているように、新約聖書をとおして教義が発展することには確かな裏づけもある。そのような教義の中には、祈りというテーマも含まれる。それにもかかわらず、一般に「主の祈り」と呼ばれているものを最終的な教えとみなしている人が多いのは、非常に残念なことである。この章では、「求めなさい。そうすれば与えられます」（ルカ一一・9）と、祈りに関する基本的な原則が教えられている。主が去って行かれたあと（ヨハネ一六・16－22）、弟子たちは主の名によって求めなければならなかったが（同23－28節）、主がともにおられたときは、そうではなかった（同24節）。主が去って行かれると、「その日には、あなたがたはわたしの名によって求めるのです」（同26節）とあ

るように、彼らの祈りに変化が生じることになる。これは非常に重要なことである。このとき弟子たちは主から祈りを教わったが、主が昇天されてからは、彼らの祈りに新たな特徴が加わったのである。

そのあと新約聖書で教えられているのは、信者が祈りと礼拝をささげるために「垂れ幕」の内側に入って神の御前に近づくことである（ヘブル一〇・19－22）。私たちは、「あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に」近づくことができる（同四・14－16参照）。この特権が私たちのものとなったのは、神の御子が「もろもろの天を通られた」（同14節）からである。福音書に出てくる祈りのひな形は、主がまだ地上におられたときのものである。これは祈りに関する最終的な教えではない。また、ヨハネの福音書で主ご自身が教えておられる手本とも一致しない。

この祈りは、「主の祈り」ではなく「弟子の祈り」と呼ぶべきものであり、しかも、教会時代の信者が、このとおりに繰り返し唱えなければならないものではない。それどころか、主は、この祈りを教える前に、「異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません」（マタイ六・7）と命じられた。パウロは、「あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい」（ピリピ四・6）と教えたが、傍点を施したことばは、新約聖書でよく用いられているものばかりである。しかし、「主が弟

子たちに教えられた祈りのことばを繰り返し唱えるように」とは、新約の書簡の中の、どこにも命じられていない。

1節　主イエスはあらゆる徳と恵みに満ちておられるので、祈りに関しても最高の模範である。主は、バプテスマをお受けになったときに祈られた(ルカ三・21)。十二弟子をお選びになったとき(同六・12)、ひとりでおられたとき(同五・16、九・18)、だれかがそばにいたとき(同九・28)も祈られた。そして、ゲツセマネの園でも(同二二・41)、十字架の上でも(同二三・34、46)祈られた。その祈りに感動した者たちは、自分も祈るように心動かされた。主はこの場面でも祈っておられたが、その祈りが終わったとき、ある弟子が「私たちにも祈りを教えてください」と願い求めた。ここでは、祈りの方法や主題、形式や言葉遣いではなく、祈りという行為そのものに重点が置かれている。祈り方は知っているのに、まだ「祈りの人」になっていない、ということもあり得る。ヨハネが自分の弟子たちに祈りを教えたという記録は、ほかにはないが、その証拠は、この節に記録されているということだけで十分である。敬虔な人々がみな、そうであったように、ヨハネも祈りの人であり、彼の弟子たちはその模範から学んだのである。

2節　この祈りは、主がまだ地上におられたころの弟子たちが唱えるべき祈りであり、筆者がそう考える理由は、この章の冒頭に記したとおりである。これは祈りのひな形であり、弟子たちはこのひな形をとおして、神に近づくことや、神の御前で畏敬の念を表すこと、そして、「神のみこころにかなう」（Ⅰヨハネ五・14）祈りとは何なのかを学ぶことができたのである。

この箇所には、原文の典拠に関する問題がある（訳注：新改訳の脚注を参照）。「写本家たちが、ルカの福音書のほうの祈りの内容を、マタイの福音書に出てくる長いほうの祈り（マタイ六・9－13）に合わせようとした」と言われてきた。諸教会で繰り返し唱えられてきたのは、マタイの福音書のほうのひな形である。J・N・ダービーをはじめ、保守的な学者たちは、入念に研究した結果、英語欽定訳に出てくる祈りではなく、新改訳に出てくる短いほうの祈りを採用している。マタイの福音書に出てくる祈りは、ルカの福音書に出てくる祈りよりも、さらに初期のころに語られたものである。主は祈りについて何度も教えてくださったのである。

主はまず御父に向かって、親しみを込めた簡潔なことばで恭しく呼びかけ、そのあとで五つのことを願い求められた。最初の二つの願いは神のご本質、および、みこころやご計画に関するものである。「あがめられますように」は、神がご自分の聖さのうちにおられることと、神がご自身について明らかにされたすべてのことに関連しており、神の御前で畏敬の念を表すことを求めている。神を呼ぶときは、崇敬の意を示す方法を常に用いるべきである。たとえば英

語欽定訳のように、神に対して「you」(あなた)ということばを用いないで、「thou」(「you」に相当する古雅な表現)を用いるのには正当な理由がある。

二つ目の願いである「御国が来ますように」は、目に見えるかたちで現れる未来の王国を待望するものである。ある著者は、「マタイの福音書は御国の五つの側面に言及している」と述べている。すなわち、①力(大能、権威)、②忍耐(猶予)、③現在の御国の占有状態、④信仰の告白、そして⑤未来の展望である。これらの側面を理解することは、福音書に出てくる御国についての教えを理解する上で大いに助けとなる。御国はすでに人々の心の中に打ち立てられているが、王であるお方が帰って来られたときに、目に見えるかたちで現れるのである。

3節　日ごとの糧(かて)を与えてくださいという祈願は、日々の必要が満たされることを求めるものである。物質的に豊かな時代は、私たちの必要が神の惜しみない恵みによって満たされていることを忘れやすい。信者は日々の必要のために祈り続けるべきであり、それが与えられたときには、神に感謝すべきである。来たるべき大患難時代の証(あか)し人(びと)たちは、生計を立てるために心から神に頼ることになる。主に忠実であるがために、住まいも食糧も失うことになるからである(黙示録一三・17)。